

金光教における吉備舞の装束について

榎 崎 久美子

(2008年11月12日 受理)

The Costume of the Kibimai in Konkokyo

Kumiko NARAZAKI

はじめに

日本にはかつて国家神道と呼ばれる、明治新政府が神社神道と皇室神道を結びつけて作りだした神道があった。これは、それまでその土地の神社を中心に祭りやその他の行事を通して氏子との地縁的な結びつきを基礎とする信仰であった神社神道を、国家本位の立場に立って利用したもので、神道を国民の精神のよりどころとして位置づけ、国民に天皇崇拝と神社信仰を義務付けたものである。昭和20（1945）年に占領軍の神道指令によって国家による神道の管理体制は解体はされたものの、そのまま神社本庁^{（注1）}という宗教団体が全国約八万の神社を包括することで神道自体あるいは神道の精神は現在も脈々と私たちの生活の中に溶け込んでいる。

神道を身近に感じるのは神社においてであるが、全国の神社では国家神道制定の際に制度化された祭祀を行っている。この祭祀において神楽舞が奉納されることがある。神楽舞とは宮中の神事芸能として、民間の神事芸能も取り入れられながら、平安期に完成をしたものである。そもそも諸社、民間の神事芸能にも神楽舞があり、それは明治以前には地域の独自性を持っていたと想像される。しかし、国家神道として神社神道が画一化される中で神楽舞も画一化され、あるいは明治期に創作されて普及し、現在に至っているとされる。

そのような流れの中、国家神道の誕生と同時期に教派神道というものが誕生した。これは幕末期に起こり、明治政府によって教派として公認された神道系教団のことを指す。その中に岡山県に本部を持つ金光教という団体がある。金光教では多くの神社で採用されている神楽舞ではなく、吉備楽という雅楽をもとにした音楽を式楽として採用し、それに振りを付けた吉備舞というものを神事の中に取り入れているのである。本論はこの吉備楽及びその音楽に振りを付けた吉備舞に注目し、これらがどのようなものであるかを整理し、また、その金光教の吉備舞における装束の特色を考察していくのが目的である^{（注2）}。

吉備楽と吉備舞

吉備楽とは明治5（1872）年の初めに、旧岡山藩池田家の楽人である岸本芳秀^{よしひで}（1821～1890）が創始した音楽である。歌謡を主とし、箏^{こと}^{（注3）}を主奏楽器として、笙^{しょう}^{（注4）}・横笛^{おうてき}^{（注5）}・篳篥^{ひちりき}^{（注6）}などを伴奏としている。雅楽に用いる琵琶、太鼓、鞆鼓^{かつこ}^{（注7）}等も用いることができるよう作られている。倭舞^{（注8）}や京舞^{（注9）}の要素を取り入れつつ、明治にふさわしい近代感覚を盛り込んで創作されたものとして岡山県独自の誇るべき総合芸術という認識をされている。由来・構成等に関しては『吉備楽のしをり』が詳述している。この本は大正9（1920）年に、宮内省式部職の雅楽部講師であり理学士でもある田邊尚雄が『日本音楽講話』という本の中で吉備楽

について欠点を述べたことがきっかけで、吉備楽師範である小野元範と出会い、小野氏とともに吉備楽について整理、分類を行ったものである。写真資料が多く、研究文献としては大変貴重で、また、これをもとに現在も吉備楽の普及が行われていると考えられる。

さて、『吉備楽のしをり』によると、まず吉備楽は岸本氏によって平安朝時代の雅楽の精神を取って、明治の日本らしい教育に一致させるために改良を企て作ったものとされている。曲数は数十種あるようであるが、すべて岸本氏が新たに作ったもので、曲によって「式楽」と「家庭楽」と「餘興楽」とに大別できる。これは決して混同してはならないと田邊氏は強く述べている。

「式楽」とは宗教の神祭式に用いるものであり、黒住教ほか12の宗教の祭式に採用されているとしている。現在わかっているところでは記述にある黒住教のほか、金光教と、岡山県神社庁に所属する護国神社の県戦没者秋季慰霊祭において採用されていることは確認できている。形式は大体において神楽と同じとしているが、楽器については神楽と違い、笙や箏を用いるとされている。舞については純粋な「式楽」に関しては神楽同様に人長^(注10)が舞うが、「式楽」の中でも余興的なものは巫女風の装束で舞うとしている。この余興的なものとして「大元詣^{おおもとまうで}」が挙げられている。これらの装束については後述する。

「家庭楽」とは上・中流の家庭において高尚な娯楽及び品性の修養のために行うのを目的として作られたもので、吉備楽の最大の主眼とするものとしている。つまり、現代でいう日本舞踊や茶道のような伝統を継承する趣味の一つとしての位置づけだと考えられる。この目的に作られた曲は極めて多数あり、『吉備楽のしをり』では「君が代」「四季の曲、春」「高砂^{かみじ}」「神路^{やま}山」「富士の峯」が紹介されている。楽器は箏だけを用いることを本来の姿とするが、笙・箏・横笛・琵琶などを付けた方が良くとしている。「家庭楽」の装束に関しても後述する。

「餘興楽」とは学校や何かの集会において、多くの人に見せる出し物としての目的でつくられたものを指し、それゆえに高尚でなおかつ教育的なものであるとしている。楽器は笙・箏・横笛・琵琶・箏・太鼓・鞆鼓を用いる。演舞者はすべて特別な衣装を用いている。この例も後述したいと思う。この「餘興楽」に関しては、吉備楽の存在価値が雅楽の精神を教育に盛り込むことにあることから形式を最も重要視し、演劇とは全く別物であり、写実的になることを強く拒んでいる。

『吉備楽のしをり』における吉備舞の装束

『吉備楽のしをり』には吉備舞の装束についての記述をいくつか見ることができる。

まず、「式楽」についてであるが、

「装束も従来の神楽のものと似て居ます」(P18L 6)

とあり、^{けんえい}巻^お繻^{みごろも}の冠に小忌衣姿の写真が掲載されている(図1)。この装束は現在の神社神道の神楽舞において倭舞を舞う人長の姿と類似している。また、女子に関しては、

「『^{おおもともうで}大元詣』の如き曲は巫女風の装束で舞ひます」(P19L 3~4)

とあり、髪を一つにまとめ、千早のような装束の上に袴をはいている(図2)。扇で胸元が見えないので現在の千早と同様の形式なのか、異なっているのかははっきりしない。また、足元には白い足袋をはいている。当時の巫女の装束を踏襲しているとしているため、明治・大正期の国家神道における巫女装束の例として重要であるとも言える。

続いて「家庭楽」の装束は、

「舞は男子は平常服に袴を付け、女子は平常服のまゝで致します。決して家庭に於て特別の舞の衣装を用ひることは宜しくありません。女の子ならば学校用の袴を付けた方が一層面白いと思ひます。」(P21L 3~8)

とされている。男女ともに平常服を用い、特別な衣装を誂えることを厳しくとがめている。当時の平常服は現代ではあまり着用する人が少なくなった和服であるが、そもそも裕福な家庭の趣味の一環として「家庭楽」が位置づけられていることから、その装束も平常服とは言え、品格のある上等なものであるということとはできる。事実、『吉備楽のしをり』に掲載されている女性の服は留め袖風の和服(図3)であり、女の子の場合も華やか色合いが想像される豪華な模様の入った振袖風の和服を着用し、袴をはいている(図4)。

「餘興楽」における装束については以下のように記されている。

「演舞者は凡て特別の衣装を用ひます」(P22L 6)



図1 式楽 神楽人長舞



図2 式楽「大元詣」二人舞



図3 家庭楽「高砂」



図4 家庭楽「君が代」

例えば「^{えびら}簀の梅」という、源頼朝の家臣で源義仲追討の先陣を担った梶原景季の武勇を演じる曲では、揉み烏帽子に鉢巻、そして鎧直垂に背には矢を負い、武將を彷彿とさせるような装束である(図5)。皇室の栄華を讃える内容を謡う「^{かざし}挿頭の菊」では折烏帽子に直垂のような装束をまとった写真が収録されていることから、曲の内容・登場人物によってその装束を変化させていることがわかる。



図5 餘興楽 「簀の梅」

以上、『吉備楽のしをり』における吉備舞の装束をまとめた。どの舞にしても装束に関して徹底した規範があることがわかる。

では現在継承されている吉備楽の装束とはどのようなものであろうか。続いて、吉備楽および吉備舞を式楽として採用している金光教における装束について述べていきたいと思う。

金光教における吉備舞の装束

まず、金光教とは安政6(1859)年旧暦10月21日(11月15日)に^{こんこうだいじん}金光大神(教祖 赤沢文治)が神託を受けて始めた新興宗教である。教えとしては、人間が神のいとし子としての生き方ができるように、また神の願いである全人類の立ち行き、世界新の平和達成成就の神業に参加し、その神願を進めていくことである。金光教では広大な天地のあらゆるものを生かし、育む神を^{てんちかねのかみ}天地金乃神と定義し、教主は神と人を結ぶ「^{とりつぎ}取次」と呼ばれる神事を行っているようである。本部は岡山県浅口郡金光町にあり、全国には約1600か所の教会がある。海外にも教会を持ち、英語圏に多く見られるが、韓国やパラグアイにも布教拠点を設置するなど世界的視野を持って活動を行っている。現在の教主は第5代目に当たる^{こんこうへいき}金光平輝が平成3(1991)年3月から務めている。

金光教では金光教典学会が中心となって吉備楽を継承している。吉備楽が金光教に初めて採用されたのは明治23(1890)年10月の教祖大祭からとされており、本格的に吉備楽が広まったのは初代楽長である尾原音人(1873~1941)が奉仕に加わるようになってからとしている。尾原氏は吉備楽の創始者である岸本氏の弟子である御船島子に入門し、その後岸本氏の息子の岸本芳武の直門として本格的に修業を行い、また明治28(1895)年には宮内省の伶人について雅楽への造形を深めたとされている^(注11)。よって、金光教では吉備楽の本流を継いでいるとも言うことができる。

金光教では吉備舞のうち、「式楽」は祭典の式次第に合わせて作られていることから儀礼音楽として適切であるため採用し、また、奉納舞として使用できる「餘興楽」と舞が振りつけられた一部の「家庭楽」のみを継承しているとしている。そして現在、それらの吉備楽を振りけ

られている舞によって「吉備舞」と「祭典楽」に分類をしている。また、「吉備楽」のうち金光教の儀式で奉納舞として使用するものを「奉納舞」、さまざまな演奏会やアトラクションで使用するものを「演奏舞」と呼んでいるようである。また、「演奏舞」のうちそもそもは「餘興舞」であった、歴史上の有名な物語を扱ったものを特に「歴史舞」と呼んでいるようである。現在では金光教本部の春と秋の御大祭や12月の報徳祭に舞が奉納されており、各地の教会でも記念祭や御大祭の際に奉納されているようである。実際にどのような名の舞を奉納しているかは今後の調査で明らかにしたい。

さて、金光教では吉備舞を舞う人を舞人^{まいじん}と呼び、その舞人になるための特別な制限はないようである。しかし、別の資料によると基本的には子供か女性が舞うとしている。そして舞装束に関してであるが、典学会によると2種類に分類することができる。

まず、「狩衣・奴袴^{ぬばかま}・金冠」の組み合わせである(図6)。狩衣とは中世に公家の日常の略服として用いられたものである。また、奴袴は指貫^{さしぬき}のことで、裾に紐が通してあり、足首で結ぶことができる。また冠は折烏帽子のかたちをとっており、装束の色によって黒冠や銀冠を用いることもあるという。図は青^(注12)の狩衣に、裾から腰に向かって淡くなる赤^(注13)の袴をはいている。他に同様の装束ながら黒冠で舞う例もある。金冠は緋の紐で結ばれており、大変鮮やかな色合いとなっている。



図6 狩衣・奴袴・金冠

続いて「舞衣^{まいごころも}・大口袴^{おほくちばかま}・銀冠」の組み合わせである(図7)。舞衣は地紋入りの絹織物で、単衣仕立てとしている。また、大口袴は典学会によると現在は塩瀬の生地を染めて仕立ててあるが、かつては地紋入りの豪華な袴や金銀刺繍のものもあったようである。袴の後ろにはゴザを入れ、着用時には白帯をした背中に、T字型の朱木と呼ばれる木を差し込み、大口袴の後ろを引っ掛けるのを正式としている。冠に関しては上記の装束と同様で、装束によって黒冠・金冠を用いるようである。図で縹色の舞衣に楓のような箔の模様が確認できる。形は現在の神社神道の巫女舞に用いられる千早あるいは舞衣と呼ばれる装束と類似しており、また透け感のある生地である。色は他に黄蘗^{きはだ}・山吹^{あざぎ}・浅葱^{あさぎ}・青^(注14)などが見られ、箔による模様入りのものも多く見られた。また大口袴は有職故実では下の袴としてさらに上に表袴^{うえのはかま}をはくこととなっているのであるが、大口袴だけで装束として完成とする能装束の大口袴と用途が類似していると考えられる。図の袴の色は奴袴と同様に裾から腰に向かって淡くなる緋の袴であるが、他に紫の濃淡や白のものが見られた。舞衣・大口袴と他の舞楽装束との類似関係については今後の研究で明



図7 舞衣・大口袴・銀冠

らかにしたい。

以上が金光教典学会が紹介する吉備舞の装束である。典学会ホームページ等で舞の場面を見るとこれらの装束は金光教の「奉納舞」の装束であると考えられる。しかし、この装束は『吉備楽のしをり』で定義された「式楽」のものとは全く異なっているものである。この相違はどこからきたのであろうか。

まず、「狩衣・奴袴・金冠」の組み合わせは昭和58（1983）年の金光教教祖の百年祭以前の正服^{せいふく}（注15）と同様のものであるとしている。つまり、近年になって金光教では吉備舞の装束に独自のものを採用したのである。それ以前の大正期の写真などでは家庭舞で指定してあった平常服での演奏の様子が確認できる。とすれば、「舞衣・大口袴・銀冠」の組み合わせに関しても新しく金光教で創造された装束であるという可能性が高い。つまり、既存の吉備楽の枠にとらわれず、金光教という宗教団体の中の一つの文化として吉備楽を継承しており、よってその装束も歴史を重ねる中で、金光教という宗教の中でふさわしいものが創造され、継承されているのだと考えられる。

おわりに

岡山の独自の音楽として生まれた吉備楽及び吉備舞は140年近くの伝統を持っている。創始された明治から大正にかけては、当時割と一般の家庭にも普及していた琴を用いての演奏が中心だったことから「家庭楽」を中心に盛んに演奏されたようであるが、現在ではその風習は廃れてしまっている。そのような中で明治期に盛んに布教活動が行われた金光教の式楽として吉備楽の一部は伝承され、現在にそれを伝えている。だが、金光教における吉備楽及び吉備舞はその装束を見るに、岡山県独自の音楽であるという地域性を持つだけでなく、金光教にとっても独自のものであるという強い意志を持ったものとして受け継がれているように感じられる。つまり、金光教は装束の持つ象徴性を最大限に活かして吉備楽及び吉備舞を伝承しているのだと考えられる。

この金光教による宗教活動の一環としての伝統文化の継承と創造の様子は、日本独自の伝統文化の危機が叫ばれる現代社会の中で継続性のあるものとしてとらえることができ、今後の伝統文化存続の一つのかたちであると位置づけることができる。よって、この金光教における吉備舞の装束について更なる実態調査とその装束の成立の過程、現在の装束調達の背景などについてさらに研究を継続するつもりである。また、吉備舞は同じ岡山県で生まれた宗教である黒住教でも伝承されているため、その装束の実態及び象徴するもの、そして金光教との比較なども視野に入れて研究を進めたい。

注

- 1 昭和21（1946）年に設立した伊勢神宮を本宗とする宗教法人である。
- 2 吉備楽についての先行研究は塚原康子による「近代雅楽制度の研究―戦前期における神道系祭祀への雅楽普及過程を中心に―」において、一部触れられている。また、田邊尚雄による『日本音楽講話』で触れられている。
- 3 日本・中国のチター属の撥弦楽器である。通常は桐の長い胴の表面に一三弦を張り、柱で各弦を調律し、右手指にはめた義爪で弾奏する。日本には七世紀に中国から伝来したとされる。
- 4 雅楽に用いる管楽器の一つである。匏の上に17本の長短の竹管を環状に立てたもので、竹管の根元に簧、下方側面に指孔がある。匏の側面の吹き口から吹いたり吸ったりして鳴らす。奈良時代に唐から伝来したとされる。
- 5 管を横に構えて吹く笛の総称であるが、ここでは神楽笛を指す。
- 6 雅楽の管楽器の一つである。奈良時代初期に中国から伝来した縦笛の一種で、現在のものは、長さ6寸（約18cm）の竹管に樺の皮が巻いてある。表に7孔、裏に2孔をあけ、上端に蘆製の舌を挿入したものである。
- 7 雅楽に用いる打楽器の一つである。奈良時代に唐から渡来したとされる。左方の楽で、演奏の速度・長短を指揮する主要楽器として使う。長さ約30cmの鼓胴の両側に直径約23cmの馬革の鼓面を固定し、通常は2本の桴で打つ。
- 8 日本固有の歌舞で、大和地方の風俗歌舞のうち礼拝を舞踊化したものとされ、雅楽の一つとされる。即位の礼、鎮魂祭、大嘗祭などで行われる。現在は舞人四人で、大和歌に合わせて舞う。また、神楽の一種としても認識され、祭祀舞として伊勢神宮、奈良の春日大社などで行われる。
- 9 日本舞踊の上方舞の一つである。京都で発達した座敷舞で、主に地歌を地に用い、繊細優美な手振りが特徴である。能の影響が強いとされ、井上・篠塚などの各流派がある。
- 10 宮中の御神楽の舞人の長のことである。行事の進行を司り、舞も舞う。舞装束は巻纓の冠に老懸をつけ、白い袍を着て、榊の枝を持つ。近衛の舎人が務めた。
- 11 金光教ではこの吉備楽の他に独自の舞楽として「中正楽」という音楽を継承しており、この音楽の創始者は尾原氏である。
- 12 ここでは公家の染織衣服あるいは重ねの色目に用いられる「青」を指す。現在の緑色。
- 13 ここでは公家の染織衣服あるいは重ねの色目に用いられる「赤」を指す。血のような鮮やかな色である。
- 14 注12と同じ。
- 15 金光教の教師の祭典の際の服を指す。

図出典一覧

- 1 式楽 神楽人長舞 『吉備楽のしをり』第2図より
- 2 式楽 「大元詣」二人舞 『吉備楽のしをり』第3図より
- 3 家庭楽 「高砂」 『吉備楽のしをり』第7図より
- 4 家庭楽 「君が代」 『吉備楽のしをり』第5図より
- 5 餘興楽 「簞の梅」 『吉備楽のしをり』第11図より
- 6 狩衣・奴袴・金冠 『金光教典学』HP「吉備舞について」より
<http://tengaku.konko.jp/item/kibigaku/kibimai.htm> 2008. 10. 22閲覧
- 7 舞衣・大口袴・銀冠 『金光教典学』HP「吉備舞について」より
<http://tengaku.konko.jp/item/kibigaku/kibimai.htm> 2008. 10. 22閲覧

引用・参考文献及びホームページ一覧

- 1 『吉備舞のしをり』 小野元範・田邊尚雄著 吉備楽和楽会本部 1920年
- 2 「近代雅楽制度の研究―戦前期における神道系祭祀への雅楽普及過程を中心に―」 塚原康子 『科学
研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書』 2001年3月
- 3 「近代日本の音楽・芸能をめぐる文化政策」 塚原康子 『東洋音楽研究』 第21号 2006年
- 4 「明治30年の宮内省式部職雅楽部」 塚原康子 『東京芸術大学音楽学部紀要』 第31号 2005年
- 5 「明治11年の式部寮雅楽課」 塚原康子 『東京芸術大学音楽学部紀要』 第29号 2004年
- 6 『金光教典学』 <http://tengaku.konko.jp/index.htm> 2008.10閲覧
- 7 『金光教』 <http://www.konkokyo.or.jp/> 2008.10閲覧
- 8 「あなたを元気にするページ」『金光教扇町教会』 <http://www.ko-ougimachi.com/> 2008.10閲覧
- 9 『金光教土佐高岡教会』 <http://www.interq.or.jp/happy/konkokyo/tosatakaoka/> 2008.10閲覧